



みどりの神様



saolipooh

みどりの神様

みどりに神様が見えるようになったのは、高校1年生になった春のことだった。みどりは、まっすぐで黒い髪をショートカットにし、すぐ日焼けで黒くなってしまおう肌を、大胆に見せる短いスカートをはいている。いわゆる、普通の女子高校生である。その小さな顔の線のなかに、大きな目と薄い唇を収め、両方の穴が見えやすい形ではあるが、感じのいい、小さな鼻が中心に据えられている。それぞれのパーツの位置は、離れすぎたりくっつきすぎることなく美しく整ってはいるが、どこか印象が薄く、とりたてて美人ということにはなかった。もちろん、若さが可愛らしさと新鮮さを盛り立て、10代特有の瑞々しい魅力は、彼女にもあふれていた。

そんな10代も盛りのある日、突然、みどりの前に神様が現れた。神様は、自分のことを「神様」と呼ぶ。甘えるときには、とりわけ「神様ねえ、神様ねえ」と連呼する。神様の声は甘ったるい。語尾を延ばすのが癖で、ともするとすぐに泣き言を言う。みどりが一度、激しく神様を叱りつけたことがあった。神様が、みどりの携帯電話のメールを勝手に見たことが原因である。

そのときも神様は、みどりに向かって、「神様ねえ、みどりのことが心配だったの。それで、ちょっとでも役に立とうと思って・・・ごめんなさい。」と言って、さんざめいた。あまりの反省の仕方に、みどりも折れて、二人は仲直りをした。

神様の容姿のことを説明しろ、と言われても困る。神様については、いろいろな人がいろいろ言うので、大人の事情で、そのへんのことは割愛させてもらわなくてはならない。ただ、みどりの神様は、全体的に緑色で、神様っぽい服装をしており、ひと目、あなたも見ることができたなら、「ああ、神様だな」という風に思うだろう、とだけいえる。

神様が見えるようになって、みどりは、最初戸惑ったものの、神様との生活は、楽しいものだった。神様は、とても泣き虫で、いじけることが多く、みどりを困らせるような言動は多かったが、憎むことができなかった。それどころか、愛らしかった。みどりが話すこと、すべてに、いちいち真剣に聞き入り、からかったり、おどけても、すべてを真に受けて、笑ったり泣いたりした。みどりが、辛いときは、みどり以上に心を痛めて泣くし、みどりが嬉しいときは、みどり以上に喜びを体で表現し、踊った。なにより、神様とは、生まれたときからの縁なので、安心感が強かった。どんなことをしても、神様だけは、みどりを見離さない。無意識のうちに、みどりは、そんな風に思っていた。

みどりの生活は、平凡なものだった。友達と一緒に登校し、お気に入りの先生に話しかけてからかい、授業を受け、その合間に遊び、週2回、美術部へ行く。多くの学生にとっては、学校生活が生活のすべてといって過言ではない。みどりも、他の多くの学生と同じように、彼女なりに、平凡で息苦しく、困難と幸福に満ちた青春を謳歌していた。

ある日みどりが家に帰ると、みどりの神様がみどりの自室で背中を丸くして縮こまって体育座りをしているのが、みどりに見えた。神様は、また涙をたくさん目にためて、切なそうにみどりを見上げた。みどりは立っているので、体育すわりの神様は、みどりを見上げる形になるのだ。みどりは、その哀れとも呼べそうな神様の姿に、半ば呆れて溜息をついた。

「どうしたの？」

みどりが言うと、神様は、いよいよ、涙を流して、うっうと嗚咽をもらした。

「神様ねえ」と、神様は話を切り出した。

「みどりが、そんな顔をするって、わかったの。」

「だから、なんで？ どうして？ なにがあったの？」

「どうして、とかじゃなくて一わかったのお」

神様は、そう言うと、声を大きくして、泣き出した。ヒステリックな泣き方に、みどりはうんざりとした。この声が、みどりと神様にしか聞こえないなんてなんだか不公平なものだ。「うるさい」と言えば、それは神様に対しての自分だけの個人的な感情の発露でしかない。「近所の人が、うるさいと思ったら困るでしょ」というような、子供に叱るようなやり方ができれば一番いいのだが。実際、この神様は、子供のようなのだ。子供に対して抱くような優しさと忍耐とを駆使しなければ、とても神様を御すことはできない。みどりは、覚悟を決めて、神様に近寄って、彼女の背中を優しくさすってやった。神様は、泣きすぎてしゃっくりを繰り返していた。

「よしよし」

子供を相手にするのだ、とみどりは思った。

「泣かないで。私が、話を聞いてあげるから。」

まだ、しゃっくりが止まらない体を震わせながら、それでも、神様は、少し落ち着いたようだった。

「みどり、ありがとう。神様、がんばる」

それでも、結局、神様が何をそんなに悲しんでいたのかは、みどりは聞き出すことができなかった。とって、そんなことは、しょっちゅうだったので、みどりは、大して気にしなかった。神様とのコミュニケーションは、複雑なのである。人間にするようにはいかない。

ところで、みどりの神様は、みどりの願いを叶えることをほとんど使命だと思っていたのだ。神様に仕事があるとなれば、みどりの神様の仕事は、みどりの望みを聞き、それが通るようにすることであって、神様もその自覚は十二分にあった。しかし、願いを叶えるといっても、ランプの魔人のようにはなかなか行かない。みどりは、神様と直接口を利くようになってから、ようやく気づいたことなのだが、どうやら、神様と自分とでは、「時間」や「量」の概念に決定的な違いがあるようなのである。例えば、みどりがとてもお腹がすいて、「今すぐ、何か食べたい」と言ったとする。神様は、最大限の努力でその望みを叶える。しかし、それは、突然、みどりの手の中においしいカレーライスに乗った皿が現れる、という形では現れない。一時間として、お母さんが「今日の夕飯、何にする？」と聞いてくる。そして、更に支度に一時間ほど要して、ようやく食べられるのである。それじゃ、願っても願わなくても一緒じゃないか、とみどりが文句を言っても、神様には、何のことだか分からない。神様にとっては、人間の「今すぐ」も「一時間後」も「十年後」もさして変わりがないらしい。そんなことで神様に文句を言うと、神様は、またたくさんの涙を流して「ごめんなさい、神様、みどりの役に立ちたいのに」と嘆いて、一日、二日は平気で悲嘆にくれるので、最近、みどりも神様に対して大らかになった。けれども、ちょっと油断をして「たまには、家でのおんびり寝てたいなあ」なんて口に出してしまえば、忘れた頃に、ひどい風邪をひいて一週間も寝込んでしまう、といったことがある。自分が願ったことなので、そうそう神様を非難することもできないのだが、みどりは、少なからず、そういつたときは不満を感じてしまう。そうすると、それをいち早く神様は感じて、まだみどりが不満を感じていないうちから、一人でしくしくと泣いている。みどりが、何かおかしいぞ、と思った翌日に、風邪をひくのである。そして、不満を感じてから、「ああ、このことで泣いていたのだ。」と気づくのである。はっきり言って、めちゃくちゃだ。しかし、風邪を引いて寝込んでいたあの日、神様と自分との認識の違いに苛立ちを覚えていたまさにそのとき、ふと、みどりは、神様と人間の自分とでは、何か基準のようなものが違うのだ、とひらめいた。違うのだから、仕方がない、と。そして、それはともかく、みどりの神様にとって、何よりも大切なのは、みどり自身なのであった。

みどりの神様が、何事か思い悩み、悲嘆に連れて泣きじゃくっていた日から一ヶ月が経過した。一日や二日たったときには、まさかひどい風邪をひいたときと同じような不幸が自分の身に降りかかるのではないかと警戒していたのだが、直にそんなことは忘れていった。そして一ヶ月が経ったある日の夜、神様は、真剣な顔をして、みどりの部屋で、みどりを正座させた。

「これは、あなたが望んだことです。」

神様は、学校帰りで、まだ制服のままにいるみどりに、いつもと違った神妙な面持ちで話した。その目には、涙が浮かんでいたが、必死に涙を流さないようにこらえているようだった。

「神様、どうしたの？」

「かみ・・・いえ、私は、あなたの神様です。それは、永遠に。」

「そうなんだ。」

「けれど、あなたが望んだのなら、仕方がありません。」

「なんの話？私、何かお願いしたっけ？覚えてないときのこと？」

「これから、望むのです。」

「え？」

「あなたは、既に望みました。これから、先の日のことです。私は、消えます。」

「また、神様特有の話し方をするのは、やめてよ。人間にも分かるように言ってくれないと、わかんない」

「これ以上、正確な言い方はないのです。」

きっぱりと神様に言われると、なんだかみどりは、裏切られたような、失望に似た感情にとらわれた。

「私のことをあなたは、見えなくなります。そうなってほしいと、あなたが願ったから」

「今の私は、そんなこと願ってないし、もし、これからそう思うんなら、そう願わないように、お互い、努力すればいい」

いんじゃないの？」

神様は、ゆっくりと微笑んだ。それは、とても悲しそうに見えた。

「あなたの望みを叶えることが、私の仕事。だって、私は、みどりの神様だから。」

そう言うと、みどりの神様の体は、霧がかかったように、みどりの目に霞んで見えた。そして、霧はどんどん深くなるようだった。

「やめて。なんだかわかんないけど、すごく、嫌だ。いい事ばかりじゃないし、神様のこと、全部が好きじゃなくても、でも、嬉しかったよ、あなたに会えて。話ができて。だから、もうちょっと、そばにいてよ！」

すると、神様の表情は見えなかったけれど、彼女の笑顔が、霧の向こうから、そっとみどりの体を包んだ。もう神様の姿は見えなくなっていた。部屋のなかには、みどり一人しかいなかった。けれど声だけが、耳元で囁くようにはっきりと聞こえた。

「そう願ったから、私は、叶えた」

そしてこれから二度と、みどりの耳に神様の声は聞こえなくなった。

30年後、みどりは45歳になっていた。もう若さを謳歌した女子高校生ではなかった。20代に結婚したが、子供はできず、夫との関係も悪くなって、結局離婚してしまった。スーパーでパートをしているが、近頃の不況でクビになってしまった。人生の半ばで、もはや自分の人生に意味を見出せなくなっていた。

ある朝、みどりは、いつもより早く目を覚ました。まだ夜中とっていい時間だったが、目が冴えてしまい、努力しても、それから眠りに入ることができなくなった。みどりは、仕方なく、それ以上ベッドにいることを諦め、起き上がった。顔を洗い、歯磨きをすると、洗面所の小さな窓から、赤い光が差し込んで、明るさに慣れていない朝の瞼に突き刺さった。みどりは、目を細めた。そして、リビングを通過して、窓を開けてベランダへと出てみた。空は、ようやく目覚めたばかりで、太陽が遠くから静かに昇ろうとしていた。けれど、朝霧に阻まれて、太陽は強い光を放つことができなかった。しかし、それでも、まだ頭がはっきりしていないみどりにとっては、その柔らかな光でさえも、強い刺激のように思われて、頭痛を感じた。実は、まだ眠いのか、それとも疲れているのか、いろんな憶測を抱いたが、どれもどうでもいいことのように感じた。みどりは、ふと、霧にとらわれた朝焼けを見ながら、思った。

私には、神様がついてるなんて思ったのが、そもそもの間違いだったんだ。

思春期のときの夢だったんだ。

神様なんて、いなかったんだ。

その証拠に、今は、神様の存在を感じない。

どんなことを願っても、無駄だったんだ。

神様のことなんて、信じなければよかった。

神様なんて、いないんだ。

そのとき、ふと、柔らかな風が吹いた。